

# 「科学的防犯術」を知ろう

以前、売れないミステリを書いていたせいもあり、常々、犯罪学には興味をもっていた。なぜ、人は罪を犯すのか。科学的な防犯とはどういうものか。自分の子供を守るには、具体的に何をすればいいのか。

犯罪ニュースに接する度に、なぜもつと、科学的に防犯ができないのか、疑問に感じていた。

先日、たまたま手に取った「犯罪は予測できる」(小宮信夫著、新潮新書)とい

う本が、個人的にかなり衝撃的だった。犯罪科学は驚くほど進化している。ただ、その手法が一般社会に浸透していないだけなのだ。

著者はケンブリッジ大学大学院の犯罪学研究科を出た犯罪学者で、「地域安全マップ」を考案した人物。この本には、われわれの素朴な常識に反する「犯罪科学的な事実」がたくさん載っている。

たとえば、子供に防犯ブザーを持たせても、実際に

EXRESS

連載 第222回

# サイエンス 宅配便

科学作家

## 竹内 薫



犯罪に巻き込まれそうになった時に鳴らせるとは限らないという。ブザーを押すより先に恐怖ですくんでしまったり、いざという時に故障していたり、せつかく鳴らしても(悪戯だと思われて)誰も来てくれなかったり。また、犯罪者はサングラスにマスクという、子供がイメージしている「不審者」の姿でないことの方が多く、そもそも犯罪ブザーを押そうという気にならない! もちろん、ブザーが全く無意味だというわけではなからうが、子供にブザーを持たせているから安心、と油断するのは禁物だ。

われわれ一般人は、すぐに「犯人」の生い立ちや性格に目が行ってしまうが、著者によれば、それよりも「犯罪の場所」に注目すべきだという。犯罪が起こりやすいのは、犯罪者が行動を起こしやすい場所であり、

その条件は「入りやすい」と「見えにくい」の二点。たとえば、中国のある地方の建物は、四方を壁で囲ってあって、入口は一箇所しかない。そこから入ると中庭があつて、その庭に面して居住区画が並んでいる。これは、部外者(犯罪者)が入りにくく、入っても人々から見えやすいという意味で、きわめて犯罪抑止力の強い設計なのだ。

逆に、誰でも自由に入出入りできる公園のトイレは、いったん入ったら、通行人からも公園で遊んでいる人からも見えにくいから、犯罪が起こりやすい場所だ。同様に、道路沿いのトンネルの歩道も危ないし、垣根で玄関が見えにくい一戸建て住宅も狙われやすい。

こういう考えを「犯罪機会論」と呼ぶ。犯罪は、たしかに人が起こすものだが、犯罪を起こしやすい場所(風景)には、犯罪の機会が眠っているのだ。

著者は、さまざまな犯罪学の研究成果を紹介してくる。警察のパトロールは、ランダムでは効果がなく、犯罪が起こりやすい「ホットスポット」を集中的に監視した方が犯罪が減るといふ。また、落書きを消すと犯罪率は下がるが、それは(落書き消しに参加すること)地域住民の意識が高まるからであり、研究者が勝手に消しても効果はないのだとか。

3歳児を抱える身としては、せめてティーンエイジャーになるまで、犯罪に遭わないよう気をつけてやりたい。そのためには、(当たり前すぎて拍子抜けするが)「親が見守る」しかないのだという。日本では、平気で子供に「おつかい」を頼むし、小学校でも一人で登下校させたりするが、そこにこそ犯罪の機会が潜んでいる。

誰でも犯罪に遭う危険はあるが、科学的な根拠に基づいて予防ができるのだ。一読をお勧めしたい。